

論文

障害当事者運動における介助者の役割

——大阪青い芝の会の運動におけるグループ・ゴリラを事例として——

定 藤 邦 子*

はじめに

1970年代の「青い芝の会」の運動が障害当事者運動に果たした役割の評価については、最終的な決着はついていないものの、大方定着しつつあると思われる。それが、障害者の自立生活や障害者福祉の理念に画期的な影響を与えたことについては、賛否両論はあるものの否定できない事実としてある。その運動は、各地方の障害者運動をも刺激し、それぞれの地方から障害者運動を立ち上げる大きな契機となった。しかし、横塚晃一や横田弘に代表される「青い芝の会」の運動とその意義については、すでに多くの研究が重ねられているが、それに影響を受けて出発し、逆に事実上それを支えた各地方の運動については、未だ必ずしも十分には明らかにはされていない。

筆者は、1970年代の大阪における青い芝の会の運動の成立と展開を追跡し、障害者自立生活運動へとつながっていった広がりや定着を検証することを研究テーマとしている。定藤2006年論文では、1970年代の青い芝の会の運動（障害者を抹殺していくような健全者社会に根ざす社会問題や告発を行い、優生保護法改定案反対運動など）と運動して行われた「さようならCP」上映運動を通して、青い芝の会が全国的な運動になっていった過程を兵庫・大阪の事例を通して明らかにした。その中で、青い芝の会の理念が特に若い障害者や健全者に受け入れられ、大阪青い芝の会の創設に至るまでの出来事を記述した。次に定藤2007年論文では、大阪青い芝の会結成とその後の運動が、優生思想を中心とする長く社会に存在する障害者の生命や人権を脅かす差別に抗議していく社会的自立を目指す障害者解放運動の中で、障害者自立生活運動につながっていった過程を記述した。

本稿では、1970年代、重度障害者の自立に取り組んだ大阪青い芝の会の運動を当時運動に関わった2人の男性介助者へのインタビューを中心に、当時、彼らが何を行っていたのか、また、何を考えていたのかを記述する。先行研究としては、大阪青い芝の会の運動における健全者組織「グループ・ゴリラ」に焦点をあて、介助を通して、健全者と障害者の関係性を検証している山下幸子の業績（山下；2000、2004、2005、2007）があげられる。本稿では、山下の業績を踏まえ、介助者から見た1970年代の大阪青い芝の会の運動がどのような活動であったのか、また、介助者は運動にどう関わっていったのかを運動の視点から考察する。

I. 関西の青い芝の会の運動における健全者運動

1. 自立障害者集団友人組織グループ・ゴリラ

重度障害者の自立にとって、介助をする健全者は欠かせない存在である。関西の青い芝の会の運動では、介助を担う健全者の組織である自立障害者集団友人組織グループ・ゴリラ（以下、グループ・ゴリラと略する）は、公的な介護保障が皆無であった頃に、運動を支える重要な役割を果たした。ここでは、グループ・ゴリラとはどういう集団であったのか、その由来とそのグループの活動について山下論文と「青い芝の会」の機関誌等を通して概観する。

グループ・ゴリラは、「障害者の介助を行い、外出や自立生活を支え」（山下、2007：5）、その運動における健全者の役割を果たしていった。関西では、1972年7月から始まった「さようならCP」上映運動を契機として、自立障害者グループ・リボンや青い芝の会が結成された。それに続いて、その介助を担い、支援していく介助者集団であ

キーワード：1970年代、障害者運動、重度障害者の自立、介助者、グループ・ゴリラ

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2004年度入学 公共領域

るグループ・ゴリラが結成された。彼らは、上映活動を続ける中で、映画「さようならCP」に触発されたこともあり、1973年1月、自分たちで映画「カニは横に歩く」を制作し、上映していった。

それらの活動の中で、ゴリラは、「健全者は健全者の組織が必要だ、障害者は障害者の組織が必要だった」という「現実要求の中で生まれてきた」ものであった。ゴリラの中には、「かわいそうな障害者のために何かしたいという人」あるいは、「映画をいっしょにつくりたい」ということだけで集まってきた人など、さまざまであり、最初は、確かな方針の下に組織されたものではなかった（河野・三矢、1978：18）。また、ゴリラが「つくられた当初は『頭は出さず、手足だけを出す』という意味で『ゴリラ』と名乗り」、主に大学の学生が中心であった（古井：2001：365）。

1973年11月、「さようならCP」上映運動事務局解散後、その事務局は、障害者問題資料センター・リボン社に引き継がれていった。リボン社は、障害者運動の情報収集を含む出版部門として設立され、その設立により、「直接障害者の手足となるグループ・ゴリラとリボン社の任務分担」¹の明確化がなされた。リボン社は、「関西での障害者運動の生成に関わってきた健全者たちがスタッフになっていることから、障害当事者運動/健全者運動の要となって」（山下、2007：32）、運動の理論的部分も含め方向性を示していく事務局としての役割も果たしていった。

1973年4月、関西のグループ・リボンの障害者の中から大阪青い芝の会が結成された。1974年4月、大阪青い芝の会第2回大会では、関西の各地に青い芝の会の運動を広げていこうという組織方針が決定された。その方針のもとで、兵庫、奈良、和歌山、京都の各府県に大阪青い芝の会の役員が派遣され、各府県に青い芝の会が結成された²。それらの結成に伴い、1974年11月には、関西青い芝の会連合会（以下、関西青い芝の会と略）が結成され、続いて、健全者も関西グループ・ゴリラ連合会（以下、関西ゴリラと略）を結成した。

各地区のグループ・ゴリラには、リボン社から専従者が派遣され、それらの「専従者が中心となる役員会体制」によって、ゴリラの運動方針は決められていった。すなわち、グループ・ゴリラは、上部組織としてのリボン社と実際に介助を担う下部組織としてのグループ・ゴリラによって構成されていた（山下、2007：32）。このように、関西における青い芝の会の運動は、青い芝の会を中心にリボン社を含むグループ・ゴリラの支援を受けて、進められた。

2. 全国健全者連絡協議会の設立

1975年11月、第2回青い芝の会全国代表者会議では、身の回りのことが自分で行えない重度障害者の多い関西の事情が考慮され、障害者の手足となりきっていく健全者が必要であると確認された。そして、「青い芝の会」が全国組織として発展した中で、全国各地の「青い芝の会」のもとに健全者組織を作る運動方針が決定された³。

健全者組織の必要性は、東京や神奈川の「青い芝の会」においても、前から言われていた。そもそも青い芝の会における健全者と青い芝の会の関係は、「やってやる」「理解していただく」という関係ではなく、「むしろ敵対する関係の中でしのごをけずりあい」「葛藤し続ける」健全者対障害者の関係であるべきであるとされていた。そのような関係の中でも、「ただでさえ『健全者』にふりまわされがちなのに、彼らが徒党を組んだらえらいことになるのではないか」⁴という消極論もあり、健全者組織はなかなか実現しなかった。しかし、関西や東北地方⁵における障害者の主体性を尊重した「青い芝」と「健全者」の運動の実践が認められることによって、第2回青い芝の会全国代表者会議で健全者の全国組織を作ることが承認され、1976年4月、全国健全者連絡協議会（以下、全健協と略する）が結成された⁶。

3. 関西グループ・ゴリラの解散と全国健全者連絡協議会の解散

関西のグループ・ゴリラは、青い芝の会の運動の裏でめざましい活動を行い、全健協設立の中心的存在であった。しかし、1977年10月、グループ・ゴリラは、「障害者からその姿勢が抑圧的であると糾弾され」（山下、2007：5）、運動は混乱していった。それを契機として、一部健全者ゴリラの中での障害者に対する命的な態度や差別的な態度への批判とともに、ゴリラの組織の中でも専従者問題が浮上してきた。すなわち、ゴリラの中で、専従者の位置が不明確であるにもかかわらず、専従者のみが考えや運動方針を決定していくという専従者による代行主義への批

判から、グループ・ゴリラの運動も問われた。

運動の混乱の中で、1978年3月10日、兵庫青い芝の会が兵庫ゴリラの解散を決定し、同月13日、関西青い芝の会が、関西グループ・ゴリラの解散を決定した。大阪と和歌山の青い芝の会はその解散に反対した。しかし、同月22日、青い芝の会全国常任委員会は関西ゴリラの解散を承認し、全健協に関西ゴリラの除名勧告をした。全健協はその勧告を受け、1978年5月2日に関西ゴリラを除名した。同年5月19日、全国青い芝の会委員会は、「健全者に目的と組織をもたせることにより関西の二の舞になることのないように」（山下、2007：37）、全健協を解散させた。すなわち、関西での運動の混乱は、関西グループ・ゴリラ解散と全健協の解散という結果に終わった。しかし、ゴリラ解散によって、関西各地の青い芝の会の運動は次第に縮小されていった。重度障害者の多い大阪青い芝の会は、ゴリラは重要な役割を果たして、ゴリラなしには運動を続けていくことはできなかった。大阪青い芝の会はゴリラ解散に反対し、1978年3月27日に、関西青い芝の会を脱会することにより、ゴリラ存続を決定したが、その後混乱は免れず、会の再建に向けての新たな取り組みがなされていった。

Ⅱ. 1970年代の大阪青い芝の会における健全者運動

1. インタビューの概要

大阪青い芝の会は、関西で初めて結成された脳性マヒ者を中心とする青い芝の会の障害当事者団体である。会への加入者数も多く、組織力も含め、関西における青い芝の会の運動の中心的存在であったといえる。大阪青い芝の会の特徴としては、重度障害者が多く、その中で、グループ・ゴリラの健全者たちは、介助を担うことによって、裏で運動を支えていった。ここでは、1970年代、ゴリラとして活動していった2人の男性介助者K氏とI氏のインタビューを通して、介助者からみた当時の運動の様子を記述する。K氏は、大阪青い芝の会設立間もない1974年から、I氏は会の混乱期の1977年からゴリラとして運動に関わり、現在も大阪で障害者支援の活動を続けている。

インタビューは、K氏には2005年8月9日に、I氏には2004年11月8日に行い、両氏に関わり、活動していった青い芝の会の運動について語ってもらった。ここでは、2人のインタビューの中から、1974年からの会の活動の様子をK氏の話を通して、また、1977年からの会の様子をI氏の話を通して、明らかにするためにそれぞれのインタビューの一部を抽出して引用した。

2. K氏からみた大阪青い芝の会の運動（1974年～）

(1) K氏と青い芝の会との出会い

1974年、大学生だったKは、友人に「重度脳性マヒの人が家において、街に出ていく活動をしているから、いっしょに行ってみないか」と誘われて、一度行ってみようという軽い動機で行き、その後ゴリラとして活動していった。その頃は学生運動が残っているような時期で、彼は狭山問題に関心をもち、社会の中での差別に問題を感じていた。彼は青い芝の会との出会いについて次のように語っている。

最初、ショックだったのは、CP⁷の人で言語障害の人が多く、何をいっているのか分からず、何度か聞き直さなければならなかったことです。しかし、僕がそれまで培ってきた社会観と青い芝の会の考えは全く違っていました。障害者のことは考えたことがなかったということもあり、抵抗感もなく真っ白い中で、青い芝の人たちに会って初めて障害者の中に素直に入っていました。ゴリラの中には学生だけではなく、働いている人とかいろんな人がいたので、自分の大学だけという狭い均質的なものでなく、いろんな人に触れて、話をして楽しかったですね。また、運動が始まった頃で、自分も新しい運動だからいろんなことをやれるのではないかみたいな意識はありました⁸。

Kは最初に障害者運動で何かをやりたいという意志をもっていただけではなく、活動を続けていく中で、「障害者の世界が自分にあるということ」と、「仲間と活動していくことが楽しかったこと」、「それなりに自分自身を生かす何かができるのではないか」⁹という思いをもった。Kが活動し始めた頃は、「さようならCP」上映運動は終

り、彼はその上映運動には直接関わっていない。上映運動を始めた神奈川青い芝の会の横塚晃一との出会いは、障害者の傍で介助者として、彼らの話を漏れ聞くというようなものであった。しかし、横塚と障害者の会話は、彼に青い芝の会における障害者主体の大切さについて考えさせるものであった。

彼は、「僕らは超下っ端でしたが、障害者の介助をしているから、横塚さんと障害者の人が話しているのを傍で聞くことができました。僕が横塚さんの目に入っているわけではないけれども、ああこの人が横塚さんか、すごいなという感じでした。」¹⁰とその時の印象を語っている。彼は、青い芝の会の事務所の掲示板に貼ってあった河野秀忠¹¹宛の横塚の手紙を見て、障害者問題について、「しっかりした考えをもっている人だなあ」と日頃から感じていた。彼が語ったその手紙の内容は次のようなものであった。

例えば、障害者Aと健全者Bが何が正しいかをということを議論した時に、横塚さんは「私は障害者Aの言っていることを支持する」と言い切っています。それが間違っていると正しいとかいう考えで進むのではなく、もちろん何が正しいかを求めていかなければいけません、「自分は障害者が本当に正しい認識をもつのに一緒につきあう」というのかな、障害者が本当の真実を知らなければ障害者問題は解決しない。Bさんが教えてやるというのでは解決にならない。

例えば、道を例にあげたら、どちらの道が近道なのかという選択肢がある時、いろんな経験をもっている健全者はこっちの方が近いということをいろんな経験から割り出して分かっている。しかし、障害者は自分の狭い考え方の中であっちの方が近いと思いこんでいるとします。じゃあその時あなたはどっちを支持しますかという場合、健全者の方が論理的で、地図からみても明らかなので、健全者のいう道を行きましょうと健全者はいうでしょう。しかし、横塚さんは障害者の間違っている道を支持すると、言い切っています。そして、障害者が本当に気づき、経験して、次の時には、やっぱりこっちにかなあかんのやなって、本当に思うところに来るのを待つというんです。そうでないと、障害者はずーっと健全者のことを聞き続けなければならなくなる。

健全者に教えてもらって問題を解決するのではなく、障害者が自分で経験して気づき、自分で考えて、判断して解決していくことがその人の障害者問題の解決なんやという考えを横塚さんはもっていました。障害者のプロセスで進まなかったら、本当の解決にはならない。人に教えてもらって、人に解決してもらおうというふうになったら、障害者の主体性というものはないという言い方をされていて、すごい人やなあと思いました。¹²

横塚が、それぞれの場面で障害者を支持し、「あなたはそう思っているのなら、私はあなたを信じます」と言えるということにKは感心した。障害者のことについて、何も知らなかったKにとって、横塚のいう障害者の主体性の尊重は、彼がその後青い芝の会の中で運動を続けていく上で、重要な教えであった。また、それは、健全者であるゴリラとして、障害者の主体性を守り、それを育てていくために障害者の手足となって支援していくことを示唆するものでもあった。

(2) 大阪青い芝の会結成当時について

1970年代初め、大阪青い芝の会結成当時は、大阪では、地域に在宅障害者が選挙に参加する運動や障害児の保育所入所運動、あるいは、サークル・WC (=ウィールチェア)¹³のような新しい型のいろいろな障害者のサークルがあり、青い芝の運動やゴリラの運動にはそれらの小さいいろんな団体が合流し、青い芝の会はそれらを吸収していた。しかし、反発もあり、青い芝の会を出ていく人たちや団体もあった。大阪青い芝の会は、それらの小さい団体を吸収し、やめていく人たちもいる中で大きくなっていった¹⁴。

大阪青い芝の会結成時は、介護のいらぬ軽度の障害者が多く、その中に重度の障害者が混じっているというのであったから、その運動は重度の障害者から出発したというのではなかった。そして、この頃のゴリラは、重度在宅障害者訪問「こんにちは訪問」につきあうとか、健全者だけで障害者宅を訪ねるというような活動が中心になっていた。

その頃は、健全者が差別者だからという話があって、同じ人間というよりも立場の違う人間ということを差

別、被差別ということをよく踏まえておかなければならないということをよく言われた。確かに、障害者との人間関係といっても、僕らとの違う生育の経験をもっているし、立場も違う¹⁵。

Kを含めゴリラのメンバーたちは、差別者であるということを知覚し、こういう差別のある社会を前向きに変えていこうという発想で運動を担っていきこうと考え、健全者は何をしていったらいいのかを考えた時、訪問活動や介護をして、地域の中で障害者が生きていける社会をつくっていく実践をしていくことであると考えた。その考えは、「こんにちは訪問」を含む日々の青い芝の活動の中でゴリラとして、障害者と接する中で導き出されていった。

ゴリラの活動の初期の1975年頃は、車イスで外に出ている障害者はほとんどなかった。養護学校に行っていた人も親が車で送り迎えしていた。また、その頃の養護学校は車イスを使っている重度の人は少数であった。

僕らの行っている在宅訪問の方達は就学猶予や免除の人たちが多かったです。その人達は、家から一歩も出たことがないというのがざらでした。仲のいい家族というのは結構多いんですが、親の頭の中でも、外に出ないというのは当たり前だったようです。それでも外へ出ましょうかという本人は喜びましたね¹⁶。

当時、青い芝の会では障害者と健全者の交流を目的としたキャンプの取り組みが始められていた。キャンプは、外出の機会に恵まれず、家族以外の人と接することの少ない在宅障害者が、初めて親元を離れて、親以外の介護を受けて生活する経験の場となった。在宅障害者の外出や社会参加はそういうことから出発した。街へ出ることから始まり、他人の介護を受けながらキャンプへの参加を経験していき、それは自立生活のステップとなっていった。Kはキャンプには、第3回から参加したが、Kや健全者にとっても、多くの障害者と接し、それぞれの障害者の抱える問題を考える機会でもあった。

(3) 障害者の社会参加 - 外出から運動へ -

1970年代は障害者が外へ出るということは、あまりなかった。そういう中で、交通機関を利用すると安全を理由に、また店に入ると雰囲気がかわるからという理由で拒否された。

その頃は、毎週、毎週、多いときには週に1回や2回、電車に乗ったらトラブルになり、店に入ったら、「他のお客さんの迷惑になるから」と拒否されけんかになりました。その頃、青い芝はすぐに怒っていましたから。けんかは本人同士にまかせていました。介護者が前に出たら怒られますから。障害者が通訳しろといえ、しますが¹⁷。

障害者は、交通機関とのトラブルでは、安全を理由に拒否された。例えば、バスの場合では、障害者が乗ると危ないといわれた。「介護者がついて、責任をもって乗車するから」と言っても乗車を拒否された。店から出て行けと言われ、拒否されている。また、交通機関の乗車拒否は、「安全のため」だとか、「障害者のため」だとか言われるが、それは違うと彼らは思い、「健全者は障害者を排除している」ということを経験して、青い芝の会の行動綱領¹⁸は正しいと実感するのであった。

Kは、青い芝の会の運動が、その行動綱領とともに障害者に受け入れられ、広がっていった理由として、当時は障害者への差別が生々しかったことをあげている。また、親には「あんたが大きくなったらどこかの施設にはいらなあかんのよ」、とか、「私は1日でも長生きして、あんたは私より先に死ななあかんのよ」とか常時言われていたから、将来を楽しいものと実感できなかつた経験を多くの障害者が持っていた。障害者は当時青い芝の会で言われていた「親は敵である」という行動綱領の中から導き出された言葉は、自らの経験の中からも理解できるものであった。

また、当時の社会は「結婚式や葬式に車イスがくるとは何事や」というような風潮にみられるように、障害者のいない社会が想定されていたが、Kは、「行動綱領は、差別の社会というのは、その差別の現実をも反映しているのであり、その差別の現実と闘っていかなければならないということを教えてくれるものであった」と語っている。

大阪における青い芝の会の活動の中で、その行動綱領は障害者と健全者ともに、その運動を支える理念的支柱であったといえる。

(4) 24時間介護の障害者の自立とゴリラの役割

会の設立時には、大阪に居住する重度・重症在宅者を組織化することが、重点目標としてあげられ、家や施設に閉じこめられた重度障害者への訪問活動を中心に精力的に行われ、仲間づくりが進められていった。その活動に伴って、重度障害者の自立生活の運動が始まり、飛躍的に介護者が必要となってきた。

1975年に金満里が大阪で初めて、他人による24時間の介護で自立生活を始めてから、24時間介護の必要な障害者の自立が増え始めた。重度障害者の自立生活には、24時間介護体制が必要とされた。Kは当時のことを次のように語っている。

自立生活が始まると朝の9時から何時まで、びしっと介護に入らなければならない。それまでは、何時に行ってもどこそこの訪問が終わったら帰っていいというような活動だったけれども、24時間の介護が必要な人が自立し始めると、もう朝から晩まで介護に入るのが、重度障害者の自立生活に必要な人でした。それがだんだん増えてくると、それが中心になってくるから、在宅訪問にも行けなくなって、ゴリラは率のいいバイトをしようということで、家庭教師や肉体労働や深夜のバイトやとかね¹⁹。

青い芝の会では、だんだん重度の人が増えてくる中で、24時間の介護体制をひく必要のある人の自立に取り組んでいった。

その当時、制度基盤が何もないのでね。なかなか難しかったなという感じ。最初から自立という問題はありました。養護学校出身者がやはり多かったけれども、就学猶予や免除の人も結構ありましたし、施設から出てくるといような人もありました。いろんなケースがありましたが、1人の介護を1週間昼と夜とで14に区切って、夜の介護に郵便局で障害者解放研究会をしている人や、教師の会に入ってもらいました。いろいろな組み立てをしたんですが、中心になるのは、ほとんどが学生のゴリラです²⁰。

金が自立生活し始めて、自立生活者が10人ぐらいまでに増えていった。

10人を支えるっていっても、お金がない状態で支えるからきつかったですね。最初に制度として獲得できたのが、作業所の職員というような身分で生活していけるように少しずつなっていった。その次は、全身性介護人派遣事業²¹とかね。そういう事業がおりてきて、介護が社会的な労働として認められるようになり、財政基盤ができて制度が整っていくようになったんです。しかし、自立生活運動はそれまでに動いていましたから、きつかったといえば、きつかったし、それなりに面白かったともいえます²²。

介護の財政基盤が全くない中で、24時間介護の障害者の自立を支えるために、ゴリラの中には学校をやめて、その活動を続けていくものも多かった。Kもそうであった。

僕なんかもありと早い時期に学校をやめちゃっているし、関わった健全者は半分ぐらい大学をでていないじゃないかな。介護に入らない週に2回が夜勤のアルバイト、お昼の1回が土方のアルバイトというふうです。そしてぼちぼち運送屋の仕事が入ったりとかして、それで、月7万円ぐらいです。ボランティアで関わるのとはレベルが違いますからね。片手間でやる活動ではありませんでした。僕はたまたまの条件で活動を続けていけたと思いますが、親御さんが病気で世話をしなければいけない人もいたし、そんな人なんかはできなかったでしょう²³。

日々の介助が無償ボランティアの中で行われる中で、介助者の日々の生活を財政的に保障する制度がない中で、ゴリラの中には、やめていく人も多かった。10人中残るのは1人ぐらいであった。そのような財政的不安や介助とアルバイトによる疲労を抱える中で、Kが運動を続けられたのは、「運動の中で、障害者がいろいろな事に意欲をもち、新しい自分の生き方を見つけようとしてはつらつとした姿に惹かれた」からであった。個々の運動が衰退期であったが、青い芝の会の運動は上昇線上にあり、新しいことにチャレンジしていこうという運動に、障害者も健全者も参加していった。またそれらの時代を背景にして、その運動は進められていった。

3. I氏からみた大阪青い芝の会の運動（1977年～）

1977年11月からグループ・ゴリラで介護に携わったIは、友達にボランティアで障害者の介護をしてみないかと誘われたことが契機となり、グループ・ゴリラに入った。

グループ・ゴリラは、しょっちゅう介護に入っていれば、ゴリラという感じでした。僕は介護に徹するという感じだったので、介護者イコールゴリラという感じでした。当時、ゴリラには、男も女も労働者もいろいろな人たちがいました。しかし、交渉やいろいろな抗議行動がある時にやるのは青い芝の障害者だけなんです。僕らが交渉に入ることは一切ないので、何の話をしているか全然分からない²⁴。

Iは関西青い芝の会の運動と彼が関わっていた大阪の中部地域の障害者について次のように語っている。

関西青い芝の会とかいろいろな方針を考えて、一定理論的な事を言える人はかなり一部の障害者でした。運動を引っ張るとか、最初に青い芝の会を作った人というのは養護学校を出ていたり、一定の仕事をしていた人たちでした。僕の関わっていた障害者は全然学校に行っていないくて、字を読めない人が多かった。これは特に大阪の特徴だと思うのですが、在宅訪問をやって、その中から出てきた障害者は養護学校に全然行っていない人がたくさんいて、青い芝とゴリラが在宅訪問するまではずーっと家から出たことのない人たちが多くて、外に出たいということと、エネルギーはすごくありました²⁵。

運動の初期は、養護学校を卒業した軽度の障害者が多く、彼らは運動を先導していたが、Iがゴリラとして活動していた頃は、在宅訪問を契機として、青い芝の会に参加していった要介護の重度障害者はどんどん増えていき、運動も重度障害者を中心とする運動に変化せざるを得なかった。当時の大阪青い芝の会の運動は糾弾告発運動と具体的実践としては、自立障害者をつくることすなわち、重度障害者がアパートを借りて、自分で介護者を捜すことであった。しかし、大阪青い芝の会の中でも、自分で介護者を捜し調整できる障害者もいたが、社会経験や自分で生活する経験をもっていない障害者が多かったので、ほとんどゴリラが介護調整をしていた。介護調整は事務所当番が電話をかけて行っていた。

青い芝・ゴリラの世界は、ゴリラ（健全者）が差別している側だから、青い芝のことを拒否することは差別することになるから、青い芝のことは絶対の世界なんです。介護調整も、明日こういうことがあるから介護調整をよろしくで、これで終りなんです。後は、何時までかかっても介護調整をするしかありません。介護者がみつからない時は、当番が学校を休んだり、バイトを休んだりして自分が介護に入るしかないという感じで、ゴリラのメンバーは相当無理をして介護に入っていました。しかし、当然無理があり、やめていく人が多いので、残った人は介護量が増え余計しんどくなります²⁶。

どんどんゴリラがやめていき、介護者不足の中で、残ったゴリラへの介護集中の状況はゴリラの苦悩を深めていった。Iはゴリラについて次のように語っている。

青い芝の運動というのは、ある意味観念的な運動ですが、障害者の中で青い芝の運動方針を考えることができ

るのは、どうしてもごく一部になり、実際には運動の枠組みや考えは、リボン社の人たちが考えていました。リボン社というのは健全者の集まりで、もともと運動家で頭がいいという感じで、その人たちも介護に入っていたと思うのですが、スーパーゴリラという感じで、大阪青い芝の会の頭脳の役割を果たしていました。ゴリラには労働者のゴリラや学生のゴリラもありましたが、学生の中には、社会にいろんな矛盾などを感じ、青い芝の会の主張に共感した人も結構いたと思います。僕は一介護者だったので、リボン社というと当時は雲の上の存在でした²⁷。

上記のIの話からは、地域で直接障害者の介助をしていたIとリボン社の間には、大きな隔たりがあるのが感じられる。それでは、この頃の介助に関わっていたゴリラとは、どんな人たちであったのだろうか。Iによると、直接障害者の介助に携わり、障害者の自立生活を支えていたゴリラは、「入会書を書くとか、会員になるというような厳密なものではなく、ゴリラかゴリラでないかは境目もなく、曖昧であった」²⁸。曖昧であるゆえに、障害者の介助にボランティア的に自由に関われる点では、ボランティアとして多くの介助者を集められるというメリットがあった。しかし、ゴリラへの出入りが自由なので、やめていく者も多かった。この頃になると、ゴリラの中でも、青い芝への運動への理解や関わりはさまざまであった。

Ⅲ. 大阪青い芝の会の運動における健全者の役割

1. インタビューからえられたこと

山下は関西の健全者運動を次の3期に区分している。第1期（1973年～1977年10月まで）の健全者運動の誕生から運動の混乱期以前、第2期の（1977年10月から1979年まで）の健全者運動組織をめぐる混乱期、第3期（1980年以降）の重度障害者の地域拠点の確立と障害者の生活要求に根ざした行政闘争期である（山下、2004）。本稿では、第2期と第3期から運動にゴリラとして関わっていった2人の介助者を取上げた。

両者は大学在学中から、ゴリラとして運動に関わっていった。Kは運動の比較的初期から関わり、障害者と出会い、障害者を知り、彼らの置かれた苛酷な状況に共に直面する。在宅重度障害者訪問活動「こんにちは訪問」で訪れた障害者は、就学免除の障害者が多く、外出機会はほとんどなかった。外出すれば、彼らは交通・生活施設において、健全者の偏見を含め多くのバリアに遭遇し、障害者解放に向けて共に闘っていく。解放運動と共に進められた障害者の自立に向けての運動は、1975年、大阪で初めての自立生活者生んだ。その後、自立生活者は一気に増え、介助者不足を生み出す。

当時の青い芝の会の全国的な運動は、公的介護保障の運動には取り組んでおらず、優生保護法反対運動とともに、社会一般の人々に対する意識を変えることが重要課題であった。そのような中で、関西の青い芝の会も「介助者は単に介護するのではなく、差別者としての存在を自覚し、障害者の手足となって、同時に友人となって、介助することが望まれる」と考えられた（立岩、1995：183-184）。

公的介護保障が全くない中で、介助者は不足し、日々を介助に費やさなければならないゴリラたちは、働く時間も縮小され、貧困状態に追い込まれる状態であった。それはボランティアを越えるものであった。それでも、Kは障害者の前向きな生き方に触発されながら共に運動をすすめていった。そこには、ボランティアを越えて、障害者と健全者がお互いに学びあっていく関係があったと思われる。しかし、後年、Kは公的介助保障によって、彼らの運動も楽になったという実感から、公的介助保障の大切さを語っている。

Iが運動に関わっていったのは、運動の混乱期であった。また、その運動は障害者の自立生活運動が中心となっていた。その中で、障害者と介助者の主と従の関係も問われるようになってきた。彼は障害者介助をすることから、運動に入っていた。彼の地区では、重度障害者が多く、介助者不足で困難を極めていた。また、障害者が主で介助者は従の関係の中で、健全者と介助者との関係の問題も浮上してきていた。介助者がやめていき、残った介助者に負担が重くのしかかる中で、彼が運動を続けていったのは、障害者から学びとることが多かったからだと思われる。

また、1977年頃になると、Iが所属する中部地区では重度障害者の自立が運動の中心になっているように、それぞれの地域によって運動の方向性も少しずつ違っていた。運動も少しずつ変化している中で、運動方針を導き出し

ていくリボン社の専従者は、「地域の現場に関わることが不十分になり、現場との摩擦が多くなっている」という批判が出てきた。このように、運動が進む中で、リボン社と青い芝とゴリラとの関係も次第にそれぞれの組織の軋轢を生むようになり、健全者運動は第2期の健全者運動組織をめぐる混乱期に向かっていった。全国青い芝の会は、その混乱を終結させるために、ゴリラ解散すなわち健全者組織の解散を決定した。しかし、大阪はその決定に反対し、共に運動を進めていくことを決定した。

2. 大阪青い芝の会の運動と健全者の役割

全国青い芝の会が関西グループ・ゴリラの解散を承認し、全健協の解散にまで至ったのは、健全者対障害者の関係において双方が対等な関係づくりを求める青い芝の一貫した姿勢に起因する。全国青い芝の会の「健全者集団に対する見解」では、次のような趣旨が述べられている。その対等な関係づくりははじまったばかりで、今までも健全者の優位性は明らかであり、健全者にこれまで障害者の自己主張をも踏みにじってきたことを自覚させ、変革させることが、対等な関係づくりに求められている。そのためには、これまでの友人組織という曖昧な位置づけをした「全健協」を解散させ「青い芝の会の手足となりきる」健全者集団の再出発が必要であると考えられた（横塚、1978：3-4）。また、今まで差別され、抑圧され続けた脳性マヒ者と「今の健全者の障害者解放運動という旗印をあげた組織」は絶対的立場の違いから考えても共闘はあり得ないと全国青い芝の会は考える²⁰。

しかし、関西の「青い芝の会」は設立当初から、障害者と健全者が共に運動をしてきたという過程があり、障害者と健全者が共闘して運動をすすめていくことが目指された。特に、重度障害者の多い大阪青い芝の会では、ゴリラは障害者の手足となり、同時に友人となって、運動を支える重要な役割を果たした。運動の混乱後、会の再建に向け、障害者と健全者が対等な関係で共に運動を進めていくことが決定された。それは第3期の健全者運動につながり、障害者とともに重度障害者の地域拠点の確立が目指された。

おわりに

大阪では運動が進むにつれて全面介護の必要な障害者が増えてきた。Kは「100人の要介護障害者が生きていくためには、どうしても社会的な労働としての介護というものがなければ無理である」と運動の中で気付いたと語っている。介護保障が皆無であった中で大阪では、組織的に介護保障するグループ・ゴリラがあったから、それらの多くの自立障害者を支えることができたといえる。関西青い芝の会はゴリラの解散によって、障害者1人1人が介護者に介護させるのが大切だということだったが、多くの障害者が1人1人がんばるには限界があった。大阪では、ゴリラを残し、組織で介護していった。そうでなければ、重度障害者は家にいる他はない状況であった。全国青い芝の会は青い芝の会の理念を重視し、一方、大阪青い芝の会は実践を重視し、運動の中で現実の状況に対処しながら柔軟に運動をすすめていった。その運動は、大阪では、障害者と健全者がともに進めていった重度障害者の地域拠点の確立に向けての運動につながっていった。

<注>

- 1 全国青い芝の会総連合会編（1978）『青い芝』No.104、8-9頁。
- 2 同上書、9頁
- 3 同上書、9頁。
- 4 同上書、10頁。
- 5 福島県では、健全者組織「かいな」が障害者の介助を中心に、福島青い芝の会を支援しながら、運動の重要な役割を果たしていた。
- 6 1976年4月24～26日、大阪府箕面市の箕面青少年の家で開催された全国健全者連絡協議会結成準備会において、全国から13団体・個人参加を含む50数名の参加者のもとで、全国健全者連絡協議会が全員一致で結成された。その中で、全健協の機関紙の発行と1976年8月に行われる全国障害者解放運動連絡会議（＝全障連）結成大会への結集が決議された。また、その決議文には、重度障害者を視点においた運動を行っていくことと障害者自身による自立と解放に向けた闘いに真に共同し、連帯して健全者側の障害者解放運動の全国的な潮流を

- 生み出していく旨が記述されている（自立障害者集団友人組織全国健全者協議会、1976：2）。
- 7 CPはCerebral Palsyの頭文字で脳性マヒと訳される。
 - 8 Kへのインタビュー（2005年8月30日）より。
 - 9 同上。
 - 10 同上。
 - 11 河野秀忠、1942年大阪市生まれ。「さようならCP」上映運動を始める契機をつくり、関西の青い芝の会の運動に当初から健全者の立場で関わる。現在、障害者問題総合誌「そよ風のように街に出よう」の編集長。2007年の著書『障害者市民ものがたり』には、1970年代の関西の青い芝の会の運動の記録が記されている。Kによると、1970年代始め、河野は、横塚と手紙のやりとりをよくしており、横塚からの手紙は、青い芝の会の事務所の掲示板によく貼られていた。
 - 12 Kへのインタビューより。
 - 13 大阪ボランティア協会が行っていた「サロン・ド・ボランティア」に参加していた堺養護学校卒業生が中心になり、月1回街に出る活動を中心に、1975年に発足した。
 - 14 Kへのインタビューより。例えば、故坂本博章（脳性マヒ者）は、1974年、自宅近くのサークルで、参議院選挙での投票所への送迎保障を要求する運動をしていた時、サークルの友人（故井上憲一）が関わっている青い芝への支援要請に行った。そこで、「なんでこんなんやってんの。もっと障害者問題に関われや。」と言われ、「あたりまえに生きていくんやから障害者であって何が悪いねん」という青い芝の会の考えに共感し、青い芝の会の活動に参加していく（『坂本博章さん追悼文集』、南部障害者解放センター、2007年、5頁を参照）。一方、故井上憲一は、青い芝の会設立準備時に、青い芝の会の労働に関する問題への考えの違い等から、会から離れて、独自に障害者運動に取り組んでいった。
 - 15 Kへのインタビューより。
 - 16 同上。
 - 17 同上。
 - 18 青い芝の会の理念である行動綱領は、次の4つの柱からなる。1. われらは自らがCP者であることを自覚する。1. われらは強烈な自己主張を行う。1. われらは愛と正義を否定する。1. われらは問題解決の路を選ばない。
 - 19 Kへのインタビューより。
 - 20 同上。
 - 21 1986年度から障害当事者の要求を受け、東京での制度も参考にして開始。当初は、月12時間、時給610円だったが、1991年には105時間1195円、1999年には153時間、1410円となった。利用者は全身性障害者1級で、親との同居かどうかを問わず、利用可能。施設入所者は3分の1の51時間である。有償ボランティア的な制度だが、発足当時のホームヘルプ制度の問題点から、①身辺介護保障、②同性介護保障、③介護者を選ぶ権利保障、という趣旨で、障害者自身の生活にあわせて使える制度で利用者も2000年には1000人となった。しかし、この制度は、2003年の障害者支援費制度開始に伴い、廃止された
 - 22 Kへのインタビューより。
 - 23 同上。
 - 24 Iへのインタビュー（2004年11月8日）より。
 - 25 同上。
 - 26 同上。
 - 27 同上。
 - 28 同上。

<参考文献>

- ・大阪青い芝の会（1981）「1/31 全国青い芝の会全国委員会報告と大阪青い芝の会の見解」三者共同機関紙局編『障害者解放通信 飛翔』No.24（1981年3月10日号）りぼん社
- ・大阪人権博物館編（2002）『障害者でええやんか！－変革のとき、新しい障害者観・人間観の創造を』
- ・『大阪ゴリラ再誕大会議案書』（1978年10月8日）
- ・関西青い芝の会常任委員会編（1975）『関西青い芝連合』No.2、りぼん社
- ・河野秀忠・三矢博司（1978）「関西における障害者解放運動の前史」障害者解放新聞編集委員会編『がしんたれ』No.3、（1978年10月5日）りぼん社
- ・河野秀忠（2007）『障害者市民ものがたり－もうひとつの現代史－』日本放送出版協会
- ・全国青い芝の会総連合会編（1978）『青い芝』No.104

定藤 障害当事者運動における介助者の役割

- ・全国青い芝の会（1978）「第2回全国委員会議案書」全国青い芝の会総連合会編『青い芝』No.104
- ・三者共同機関紙局編（1978）『障害者解放新聞 がしんたれ』No.3（1978年10月5日号）りぼん社
- ・三者共同機関紙局編（1979）『障害者解放通信 飛翔』No.3（1979年2月10号）りぼん社
- ・障害者の解放を目指す講座 関西実行委員会（1975）『統一テキスト障害者解放講座』
- ・『坂本博章さん追悼文集』、南部障害者解放センター、2007年
- ・定藤邦子（2007）「大阪における障害者自立生活運動－1970年代の大阪青い芝の会の運動を中心に」『コア・エシックス』Vol.3、立命館大学大学院先端総合学術研究科
- ・定藤邦子（2006）「大阪・兵庫の障害者自立生活運動の原点」『コア・エシックス』Vol.2、立命館大学大学院先端総合学術研究科
- ・自立障害者集団友人組織全国健全者協議会（1976）『全健協－結成大会報告集』
- ・立岩真也（1995）「はやく・ゆっくり－自立生活運動の生成と展開」安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也『生の技法 増補改訂版』藤原書店、167頁。
- ・立岩真也（1999）「自己決定する自立」石川准・長瀬修編『障害学への招待』明石書店
- ・「日本脳性マヒ者協会、大阪青い芝の会、1974年（第2回）定期大会」関西青い芝の会連合会常任委員会編（1974）『関西青い芝連合』No.1、りぼん社、
- ・古井正代（2001）「CPとして生きるっておもしろい」全国自立生活センター編『自立生活運動と障害文化』現代書館
- ・森修生活史編集委員会編著（1990）『私は、こうして生きてきた－森修生活史－』京都・城陽市陽光出版
- ・山下幸子（2000）「障害者と健全者の関係からみえてくるもの－障害者役割についての考察から」大阪府立大学社会福祉学部『社会問題研究』第50巻1号
- ・山下幸子（2004）「健全者として障害者介護に関わるということ－1970年代障害者解放運動における健全者思想を中心に」『淑徳大学社会学研究紀要』第38号
- ・山下幸子（2005）「障害者と健全者、その関係性をめぐる模索－1970年代の障害者/健全者運動の軌跡から」『障害学研究』第1号
- ・山下幸子（2007）『障害者運動にみる障害者と介助者の関係性』大阪府立大学大学院社会福祉学博士学位論文
- ・横塚晃一（1978）「健全者集団に対する見解」全国青い芝の会総連合会編『青い芝の会』No.104

The Role of Care-Givers in the Disabled People's Movement: A Study of Group Gorilla in the Osaka Green Grass Association

SADATO Kuniko

Abstract:

The Osaka Green Grass Association, organized in 1973, started a movement for the freedom and independence of disabled people. One of the group's aims was to empower severely disabled people who cannot live without care to attain autonomous lives.

Though the movement was primarily for disabled people, the non-disabled attendants who provided care played an important role, too. In fact, although there were no public care systems in the 1970s, support by non-disabled attendants, despite the constant shortage of attendants, produced many independent disabled people. A group of these caregivers was called Gorilla, because these attendants were expected to use their arms and legs for care without using their brains. Moreover, as the movement respected the independence of disabled people, non-disabled people were expected not to interfere in the movement.

In 2004 and in 2005, I interviewed two non-disabled attendants who were involved in the movement as gorillas in the 1970s. Based on these interviews, in this paper, I describe the activities and thoughts of the two care-givers. I also examine the movement of the Osaka Green Grass Association, and I consider how care-givers were involved in the movement from a non-disabled person's point of view.

Keywords: 1970s, disabled people's movement, independence of severely disabled people, care-giver, Group Gorilla